

2017年1月29日 茅ヶ崎教会での分かち合い (マタイ5:1~12a)

① ゼファニア2:3, 3:12~13 ② Iコリント1:26~31 ③ マタイ5:1~12a

聖書的な知識として山上の説教とルカとの並行箇所:

今日の福音は「山上の説教」と言われるマタイ5章~7章の冒頭です。イエスは群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた、と。(8:1で、イエスは山から下りて・・・)

\*蛇足ですけどルカ6章にも (v17. 山から下り)、平地の説教と言われ「幸いと不幸」についてイエスの説教があります。ルカの場合は6章17節に「イエスは彼らと一緒に山から下りて、平らな所にお立ちになった。大勢の弟子とおびただしい群衆が、ユダヤ全土とエルサレムから、・・・来ていた。・・・さて、イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた。

「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなた方のものである・・・」

マタイの8つの幸いのうち、ルカと共通するのは、「心の貧しい人々」-「貧しい人々」

「悲しむ人々」-「泣いている人々」「義に飢え渴く人々」-「飢えている人々」です。

この3つの「幸い」だけが、現実に抑圧され、他者から苦しめられている人々について

で、他の「幸い」は、他者に対する能動的な態度、「柔和さ」「憐れみ深さ」「心の清らかさ」

「平和を実現する行動」について述べます。(雨宮慧師) \* (蛇足終わり)

分かち合い:

山上の説教はマタイ5-7章でイエスの説教です。高校生の頃に「神の国の憲法」と言われました。世の光とされたイエスの弟子の生き方について、つまりわたしたちのことです。

今日の福音は山上の説教の冒頭で、「真福八端」=the Beatitude とか「山上の垂訓」とか言われていました。\*\*広辞苑では「山上の説教」で「山上の垂訓」ともいう。垂訓=教訓を解き明かすこと。イエスの教えで、「心の貧しい人々は、幸いである。」から始まって、

「悲しむ人々は、幸いである。」「柔和な人々は、幸いである。」「義に飢え渴く人々は、幸いである。」「憐れみ深い人々は、幸いである。」「心の清い人々は、幸いである。」「平和を実現する人々は、幸いである。」「義のために迫害される人々は、幸いである。」と「幸い」

が8回繰り返されています。典礼聖歌398番に「幸いなるかな」という歌もあります。\*

3節と10節で「天の国はその人たちのものである」と繰り返して、囲い込んでいますので、テーマは「天の国」です。天の国で幸いな人々とは誰かということです。その現実今日の福音の「幸い」のことです。

\*\*蛇足的でマタイにおける「天の国」とその他の福音の「神の国」とその意味:

イエスの宣教の第一声はマタイでは「悔い改めよ。天の国は近づいた」、マルコは「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」となっています。マタイは「天の国」、マルコやルカでは「神の国」です。当時のユダヤ世界では、「神」を口にするのを

避け、婉曲的に「天」と言い、マタイは読者層を考えて、「神の国」を避けて「天の国」を使っています。聖書が述べる天の国とは、神の統治や支配、また支配の及ぶ領域の意味です。

分かち合い：「天の国」の本質は神と人との親密な交わりの中で生きるところにあります。**V3 と V10 は現在形の動詞。V4～9の動詞は未来形で示す。**「天の国」は今既に始まっているが、完成したのでなく、まだ**発展途上**にあります。**(already~ not yet)**

幸いな人はイエス自身ですから、**山上の説教は、イエスの自画像**と言えます。イエスを見倣って、外からの圧迫にくじけることなく、関わりを大事にする人は「天の国」つまり「神の王的支配」のうちにいます。

**\*\*蛇足ですが、**「天の国」「神の国」は私たち一人一人の**体がすでにそれを生きている**と言えます。体のどの器官も自己主張することなく、ほかの器官が生きるために年中無休で働いており、しかもそれは自己犠牲でなく同時に各器官が生かされているという、**無償の愛の営み**をしています。共存共栄と言えます。世界平和もこのようにすれば実現可能になるのではないのでしょうか？

分かち合い：私たちの修道会、キリスト・ロア宣教修道女会は「御国が来ますように！」のモットーのもと、**全世界へキリストの支配される神の国を広げようとして宣教活動に従事**しています。自分が修道会から派遣された場所において、必要とされることをもちろん識別しながら行うということです。キリストの弟子として、**山上の説教を生きる**ことによって**神と人々との関わりを大事**にしながら、この茅ヶ崎教会でも奉仕できればと願っています。

私はいつの頃からか「心の清い人は幸いである。その人は神を見る」という言葉が自分のうちに宿って、聖堂に入って十字架のしるしをしてから、開口一番の祈りは「ご聖体のうちにおられる主イエス、御まなざしを注ぎ清めてください。心の清い人は神を見ると言われます。body, spirit, soulを癒し、wholeとし、聖なる者としてください。」です。今日の個所だけでなく、**山上の説教の全体には実行がむづかしい**とも言われていますが、その時はイエスの姿を思い浮かべて、どんな気持ちだったのかとか、どのようにして生きられたかを思い起こすのも参考になるかもしれません。

前回9月には**ルカ14章と並行個所マタイ10章で「弟子の条件」**について分かち合いをしました。イエスの弟子になるには、**血肉の絆よりもイエスを大切に**し、**エゴの自分と決別してイエスとともに歩む**ことでした。今日は、十字架の死を通して世界の王となられたイエスの支配される天の国の住人として、心の貧しいものとして何よりも神を信じ、委ねて神との交わり、人との交わりを生きる人こそ「幸いな人」と告げられています。

「聖書と典礼」の脚注参照：

○脚注で「心の貧し人々」は直訳では「霊において貧しい人々」（ルカ 6：20 参照）

日本人にとって「心の貧しい人」という表現は抵抗があります。心は豊かなのが良いという常識があるからでしょう。「心の貧しい人」は旧約時代から神以外に頼るものがない貧しい人、アナウイムに通じるでしょう。霊において貧しさを選ぶ生き方で、またイエスの姿が浮かびます。「富んでおられたのに貧しくなられたイエス・・・」。

○マタイ 5：3～6 （ルカ 6：20～23） 3～6 節 ⇒ 苦しみに耐えている人々  
（外から襲う困難に圧迫されている人々）

7～11 節 ⇒ その苦しみの中でより積極的に生きようとしている人々の姿